

朝を ひらく

永田 円了
真国寺住職



世界は一つ、と言っければ実は皆バラバラの世界を生きている。私とアナタの世界はまったく違う、ということである。生物学者、ヤーコプ・ユクスキュルは「すべての生物は、それぞれ異なる時間と空間を生きている」と言い、それぞれの世界を「環世界」と名づけた。

例えば、森を想像してみよう。ある人は杉の木が生い茂り、薄暗い森を想像する。またある人は、小川が流れ、原始林の隙間から日光が差し込むような森の姿を想像するかもしれない。

進化する環世界

ユクスキュルは、森に住むマダニを例にとり、いったいマダニにとって森はどのような捉えられているのか、を考えてみた。視力、聴力をもたないマダニにとって森はただの漆黒の闇。しかしマダニは、人間の何倍もの臭覚と温度を感知する能力のおかげで、近くを通る動物に食らいつき、血を吸って生きているのである。つまり、マダニは臭いと温度しか感じない

「環世界」に住んでいるのである。

では人間同士の環世界の違いはどうだろうか。十数年前のある日、ちよつといひですか、と真国寺の本堂に入って来られた人がいた。本尊さまを見て「あ、この仏像は脱活乾漆像ですね」と、おっしゃった。私は何のこ

と分からず、その男性に仏像について詳しく教わることになった(詳細は「朝をひらく」2009年5月25日朝刊参照)。

仏像に詳しい方の環世界が、私の環世界を広げる。ある人には、はっきり見えているものが、他の人には見えていない。同じ空間にいても、かくも異なる環世界が人間同士の間でも存在する。

在するのである。

そして環世界は進化しうる。

盲導犬はイヌの環世界に、きびしい訓練によって人間の環世界を植え付けた存在である。イヌと人間の両方の視点を持ち合わせ、人の手となり足となつて働いてくれる。

人間の環世界も、他者の視点を学び取ることにより変わる。大きく変わる。いや進化し、進化したければならない。

「環世界」という新しいコトバを知ることにより、自分の中の何かが変わる。自分では考えもしなかったような世界の存在。自分が思っている現実とは唯一の現実ではないとの自覚。人それぞれの持つ世界の存在。そして何よりも、他者の世界を認め尊重する気持ちだが、人生をまあるくしてくれそうな気がする。

他者認め人生まあるく